

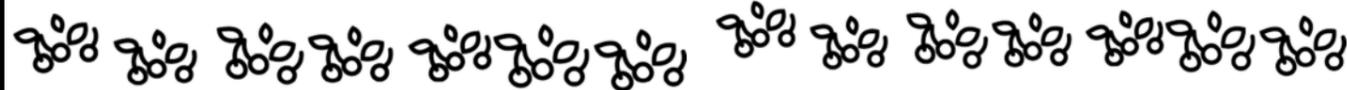
ご家族の皆様へ

### 10月「なんでもおしゃべり会」のお知らせ

毎月恒例になったおしゃべり会。開催し始めて半年がたちましたが、いろいろな方に参加していただいております。実は、このおしゃべり会に参加して、私たち職員がはじめて聞いた話もちらほら。医療機関でのこと、児童期から成人期での違い、特別支援学校や一般校の情報の違いや学年での違い。保護者の方の情報のやりとりが、私たち支援者にもいい情報をいただけたります。10月も平日開催ですが、もし参加できない方でも、「こんな会を開いてよ」とか、「こういう学習をしたい」という希望があったら、担当久保までいつでもお声かけください。

**日時: 10月14日(水) 午前 10:00~12:00**  
**場所: りとるの家 はなれ 市民交流スペース**

皆様のご参加お待ちしております



### リレーエッセイ

毎月お楽しみ『リレーエッセイ』！  
りとる職員が思い思いのことを書きます。  
今回は、「放課後等デイサービス事業所ららん」児童発達支援管理責任者の笹川と、普段皆様とお会いすることの少ない「総務」の豊岡です。

「初」「幸」

今年のらんの夏休みを文字に表してみました。  
「初」…今まで、らんでいった事が無い所へたくさん行きました！  
今まで、食べ事が無い物をらんで食べに行きました！  
「幸」…子どもたちの「初めて」を一緒に楽しみ喜びを分かち合えたことは「幸せ」の一言に尽きるなあと感じました！  
いろいろな場所に行って子どもたちのいろんな表情を見ることが出来たり、「今まで家で食べた事ないんです」という物を一緒に食べる事ができたり…スタッフにとっても本当に楽しい夏休みでした。

らんでは今後も色々な事を経験して頂けるようにプログラムを計画していきます。楽しそうだな・おもしろそうだなと思うものがありましたら是非参加してみてください！！

スタッフ一同お待ちしております(\*´`\*)

笹川 隼也



「書類っていうのはね、物語なんだよ。あなたが今作っている書類は、相手に物語が伝わるかね？」  
以前勤務していた職場で、私が県や国に提出する書類の作成に苦勞していた時、上司に言われた言葉です。続いて、こう言われました。

「まず「私はこういう者(会社)です」という自己紹介。そして、こういうことを考えていて、こんなことがしたい。そのためにはこういうものをとても必要としていて、この書類を読んでもらっているあなたにはこういうことをしてほしい。そういう「物語」が伝わってくるような書類を作りなさい。あなたはそういう仕事のできる事務員になりなさい」今でも、書類を作る時にはこの言葉を思い出します。

ちなみに、当時の会社の勤務初日に「本当は男の社員が欲しかったんだけど、応募してこなかったからね」と言われたことも、今となっては懐かしい思い出です。 豊岡 藍

来月は、障害部事務長の小林と、放課後等デイサービス事業所「にこ」指導員の浅野です。  
どんなエッセイが読めるかお楽しみに！！



発行者：社会福祉法人みんなでいきる 障害福祉事業部りとるらいいふ  
通信に関するお問い合わせ先：事業部代表 TEL025-542-0170 (担当：久保)

# りとるらいいふ通信

(社福) みんなでいきる  
障害福祉事業部りとるらいいふ  
発行日：2015年9月

世間では、またしても様々な自然災害で大変な思いをされている方々がいて、ニュースでその映像を見る度、「もしこれが上越だったら自分はどうしていただろう」と思います。どんな時間帯に起きて、りとるのサービスは回っています。大切な命をお預かりしているからこそ、“非常時対策をしっかり考え、訓練しよう” そう思う今日この頃です。



## りとる事業所紹介★パート5

# 生活介護事業所「きら」

第5回目を迎えました「りとるらいいふの事業をちょこっとご紹介」のコーナーですが、今回は生活介護事業所「きら」をご紹介します。

石橋にある木製の建物「りとるの家」で行われているのが、生活介護事業所「きら」。実は、この建物、昔はアロマとハーブのお店を経営されていた建物でした。数年前、事務所を昭和町に構え、高田エリアでサービス展開をしたりとるですが、「直江津エリアにサービスが足りない」という現実と、「これまで学齢期を支援してきた方々が卒業後に通う生活介護事業所が足りない！どうかして作らねば！」という想いから、直江津で建物を探していました。



その時、偶然片桐事業部長が地域の別の建物のことを質問したくて立ち寄ったアロマのお店のオーナーが、その話を聞いて「それならこの建物を買いなさい！」という提案をしてくれ、「りとるの家」を手に入れることになったのです。

「りとるの家」は木造ならではの柔らかい雰囲気の特徴です。生活介護のご利用者様は、毎日朝から夕方まで長時間同じ場所でご過ごされるので、薄暗い部屋ではなく、開放感のある明るい場所でご過ごしていただきたい、そう思っています。

現在「きら」には、平均20名の方が毎日通ってこられています。主な作業内容は、清掃、雑貨(さをり織り、アイロンビーズ、ビーズ小物アクセサリーの作成)、農耕、和紙の作成です。清掃グループは、りとるの家はなれの清掃を受託し、毎日午前も午後も活動しております。農耕グループはビニールハウスで作物を育てています。この夏は、きゅうり、すいか、めろん、



枝豆、ミニトマトが収穫できました。とはいえ、まだまだ試作段階で、出来上がった作物は販売できるものではない為、現在はできたものをご利用者の皆様でいただいている状況です。雑貨グループでは、様々な商品を作成し、現在サンクス高田での定期販売(月2回)の他、各種福祉イベントでの販売やうみてらす名立とLUSSO(美容室)での委託販売も行っております。

「きら」は成人支援のため、こうした作業を行う中でも、将来の自立生活に向けて各自の生活スキルの獲得を目標としています。また、作業以外にも、余暇的な楽しみの保障や社会経験の獲得を目標に、週に2回外部講師を招いてのダンス活動や、年に1回小集団での外出活動も行っています。今後の活動の中では、現在行っているバイタルチェックや健康管理に加え、嘱託医との連携を取っての更なる医療連携体制の整備を考えているところです。



## りとるの感謝祭に関するお知らせ



来る10月11日(日)に、りとるらifでは「りとる感謝祭」と称して、1日イベントを実施します!!

りとるの家はなれが建設されて2年、これまでも毎年8月に「りとるのえんにち」というイベントを実施してきましたが、その時には様々なサービスも同時に提供させていただいていた都合で、どうしても人手も足りずに小規模なイベントとなっていました。ですが、今年は再度目的から練り直し、今後の障害福祉事業部りとるらifの恒例イベントとして実施できるような大きな企画をさせていただくこととなりました。

「りとる感謝祭」の目的は、その名の通り、日々お世話になっている皆様に感謝し、1日思い切り楽しんでいただくことです。ご利用者の皆様やご家族はもちろんですが、関係機関の皆様や、石橋の地域住民の皆様、ボランティアの皆様、そして様々な形でりとるを応援してくれている皆様に感謝の気持ちを伝えようということで、緊急対応以外の通常サービスは全事業閉所させていただき、全職員で当日を運営する予定です。

イベントには、沢山の食品販売のお店も参加していただきますし、1日通してステージを実施し、上越市内外の様々なグループから歌や踊りを披露していただく予定です。当日は、この日のために結成された“片桐率いるりとるバンド”もステージに上がる予定もあります。当日のために、現在業務終了後に必死になって練習しています(笑)



また、ゲームコーナーも設けて子供たちが遊べるような場所も用意していますので、詳細は、本日同封させていただいた「りとる感謝祭」のチラシをご覧ください。当日は、職員の思いが通じて秋晴れになると思っていますので、ぜひぜひお立ち寄りください。お待ちしております♪



## 研修報告～事業部内リーダー研修～



今月は事業部内での研修をひとつご報告いたします。

現在、障害福祉事業部では様々な内部研修を行っていますが、9月から半年間毎月実施予定の研修が「事業部内リーダー研修」です。研修対象者は、サービス管理責任者や児童発達支援管理責任者など各事業の現場の担当責任者で、ご利用者の皆様や関係者の皆様と一番多く関わらせていただいている職員です。研修の目的は、各現場のスキルが上がるような現場監督とは何かを考えることや、様々な職員をまとめるうえでどうマネジメントしてゆくのかを考えるなど、直接的な支援の学びとは別の観点での研修になります。

今月(9月)はその初回として、北海道にあります「社会福祉

法人ゆうゆう」理事長の大原祐介さんに来ていただき、「現場のリーダーとしての立ち振る舞い」などを話していただきました。参加者は、大原さんの言葉をじっくりと聞き、そして日々の自分の悩みを話し合っ、どう解決に向けていくのかという志を学べた時間でした。来月以降も様々な講師をお呼びして研修を実施予定ですので、また通信等を通じてご報告をさせていただきたいと思ひます。



## アダルトチルドレンとして生きてゆくということ

社会福祉法人みんなでき  
副理事長 片桐公彦

かなり前のコラムにも一度書いたことがありますが、私の父は地元ではちょっと知らない人がいないというくらいに有名な気合いの入ったアルコール依存症でした。酔ってありとあらゆるところにご迷惑をかけて生きていました。普段は虫も殺せないようなおとなしい人でしたが、ひとたびお酒が入ると人格が入れ替わったように目つきが変わり、気が大きくなり、わずかな量でも足元が「千鳥足」とはいえないくらいにフラフラになっていました。

酔いつぶれて、近所の店に迎えに行ったことも何度かありました。その前日は期末テストで、大雪の中、父をおぶって帰ってきた記憶は自分の中では鮮明で強烈な記憶として残っています。もちろんテストの結果は散々でした。私が15歳の時に父は自転車に乗って飲みに出かけ、薄暗くなった新井柿崎線の道路でスピードに乗った乗用車に後ろから追突されてあつけなくこの世を去ってしまいました。

この世界に入って、福祉の勉強をそれなりにするようになってから知ったのですが、私はその環境や境遇から考えると「俺って、アダルトチルドレンかなあ」と自覚するようになってきました。

「アダルトチルドレン(以下《AC》とします)」とは一般的には「親からの虐待」や「アルコール依存症の親がいる家庭」「家庭問題を持つ家族の下」で育ち、その体験が成人になっても心理的外傷(トラウマ)として残っている人をいうようです。破滅的、完璧主義、対人関係が不得意といった特徴があり、成人後も無意識裏に実生活や人間関係の構築に影響を及ぼすといわれています。

ACにもいろいろ分類がありまして「ピエロ(道化師)タイプ」「ケア・テイカー(世話役)タイプ」「ヒーロー(完璧)タイプ」「スケープ・ゴート(身代わり)タイプ」「ロスト・ワン(自己否定)タイプ」とあります。私は自己分析的にいうと典型的な「ケア・テイカータイプ」に該当するようで、子供のころからごくごく自然に「大人が気に入る自分」を演じることが上手だったと思います。どういふ事を言うかと大人たちは喜び、満足するかが直感的に分かっていました。大人の発する言葉や叱責にいつも怯えているようなところもありました。世話を焼くのが好きな一方で、他人からの評価にいつもビクビクしていました。もっと上手に世の中を渡りたいのに、うまく立ち振る舞えない自分がちょっと嫌いでもありました。自分で言うのも変ですが、ちょっと大人びたところもありました。当時、大流行した「ビックリマンチョコ」にも「聖闘士星矢」にも「キン肉マン」にも興味を持てず、いつも本ばかり読んでいました。年上や大人たちと過ごすことに少しもストレスを感じませんでした。(そういう意味では得な性格だったかもしれません)

自分が周囲のともだちと「少し違う」と感じたのは自分が小学校3年から4年くらいの時で、それが父親の存在が影響していること、みんなが興味を持っていることにほとんど関心を持てなかったことから「少し、自分はみんなと違うようだ」と思うようになりました。

「ケア・テイカー」としての自分が福祉の仕事を選んだのは、ある意味、自然なことといえるのかもしれませんが、若いころに何度も仕事を変えた自分が今のこの仕事を「天職」と言えるくらいに思っているのはラッキーなことだったと思います。母が福祉行政の仕事に携わっていたことも強く影響していましたので、この仕事を選択させてくれた母には心から感謝しています。ですがそれ以上に、私にとってはアルコール依存症の父の影響が大きかったという強い自覚があります。父親との関係や記憶は、それはなかなか壮絶なものでしたし、憎みもしました。この父親と離れて暮らすことはできないかと真剣に考えたこともありました。ですが、今、結果として自分がこの仕事や生き方を選択し(自分が思っているだけかも知れませんが)誰かのお役に立てているということは「相当に困った存在だったアルコール依存症の父親」の存在がなければ、私は今、大げさにいえば存在していなかったのだと思います。その意味では自分は父に感謝しなければいけません。

今も仕事の中でACとしての自分の生きにくさがないわけではありません。人と会うのは疲れますし、視線や評価が気になります。どうすればこの人が喜ぶかもすぐに分かっ、てしまいます。逆もまた然りです。「ケア・テイカー」である自分に嫌気が差すこともないわけではありません。

私はこの話は「乗り越えた」という美談にしたいわけでもありません。乗り越えてなんかないし、自分でも気がついていないトラウマをいくつか抱えているのだろうと客観的に思っています。でも私は私として40年もこの生き方を生きてしまったわけですし、それはもう変えられない事実だったりもします。自分の幼少期の環境と今の仕事の関連性を自慢したいわけでもありません。自分にとっては当時の環境は「壮絶」だったけれど、いってみれば子どもの頃の私にとっては「ごく当たり前の日常」だったわけですし、その中で自然に自分は育ってきたのだと思います。

40歳になって、人生も折り返しに差しかかり、仕事として様々な生き辛さに向き合う自分としては「生き辛さは何だろう」というテーマをずっと問い続けています。そんな時私の父親の存在、そしてその存在によってACとして生きている自分の存在や、周囲の「生きづらさ」を抱えている人びとに、思いを馳せてしまいます。

だから思います。私たちはその苦しみや困難や様々な事情を分かち合いながら、みんなで生きていかなければならないのだと。

